

富澤コラム20

3月10日に思う

理事長 富澤 暉

3月10日といえば、先ずは帝国陸軍の奉天入城を祝う陸軍記念日のことなのだが、それと同様に国民から忘れられつつある東京大空襲を思い出す日でもある。東京大空襲は、1944年夏にサイパン・テニアン・グアム等に侵

攻した米軍が、大規模航空基地を確保し、そこから日本の首都東京へ長距離爆撃機B29により爆撃を加えたことの総称である。同年11月から翌年8月の終戦時に亘るものだが、その中で特に大規模なものとして、3月10日と5月24・25日の空襲が今なお老人達の記憶に残っている。

3月10日の空襲を「下町空襲」、5月24・25日を「山の手空襲」という。B29の出撃数でいうと前者が325機、後者が500機前後というから規模としては後者の方が大きいのだが、死者の数をみると、「下町」が10万を越えたのに対し、「山の手」では3・4000人であった。その差は、家並や強風の違い等、色々と言われているが、3・4月の対処で官民ともに学習し、5月にはそれなりの対応が出来る

ようになっていたというところらしい。

私の父は家族を疎開に出し、5月24・25日に一人で東京に居たのだが、焼夷弾が降り始めるや直ぐに最寄りの焼け跡に避難した。「壊れた水道から水が漏れているところにいたから何の心配もなかった。他の人たちも沢山来ていたよ」と後に語っていた。

現在、北朝鮮問題で喧しいが、私は日本の大都會が核兵器で攻撃される公算は極めて少ないと考えている。ただし、万が一のことには備えて置かなければならない。ミサイル防衛も敵基地攻撃能力も勿論必要だが、やはりシエルトー構築が一番大事である。

核攻撃による損害の80%は熱線と爆風効果によるものだと聞く。そして残留放射能による被害は1週間を過ぎると半減する。各都市にある地下街に市民が1・2週間暮らせるスペースと備蓄食糧を準備し、空気清浄機で新鮮な空気を確保しておけば良い。

この種シエルトー準備について日本は先進国中最低で、わずか0・02%だという。スイス・スウェーデン・韓国では100%で、中国・米国でも60・70%である。その準備は防衛省の仕事ではなく総務省・国土交通省と各自治体の担任のだが、我々軍事に関わる者にはその警告を発する責務があるのではないだろうか。